

古文ドリル：「て」の識別 100問

対象：高校生・大学受験生（共通テスト～難関私大・国公立二次まで） **著作権：**個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：「て」の正体（5パターン）

古文の「て」は識別問題で頻出。大きく **5種類** あります。

種類	接続/品詞	判別ポイント	例
① 接続助詞「て」	連用形接続	動作の連結「～して」	行き て 、見る
② 完了の助動詞「つ」連用形「て」	連用形接続	「て＋き／けり／けむ」	行き て けり
③ 格助詞「にて」の一部	体言接続	「AにてB」	京 にて 生まる
④ 接続助詞「して」の一部	形容詞・形容動詞・断定「なり」・打消「ず」の連用形	「～くして」「～にして」「～ずして」	心安く し て
⑤ 形容詞・形容動詞の連用形（～く・～に）＋接続助詞「て」	連用形接続	「～くて」「～にて」	高く て 広し

※体言＋「にて」の下に「あり・おはす・侍り」などが来て「～で（いらっしゃる）」と訳せるときは、格助詞ではなく断定の助動詞「なり」の連用形「に」＋接続助詞「て」（神**にて**おはす＝神でいらっしゃる）。体言＋「にして」（人に**して**＝人であって）も、断定「なり」の連用形「に」＋接続助詞「して」。「して」の見分けは下のコツ④。

識別の鉄則

1. **直前の語の活用形と品詞** を見る
2. 動詞の連用形＋「て」 → 接続助詞 or 完了「つ」連用形
3. 体言＋「にて」 → 格助詞「にて」（下に「あり・おはす・侍り」が来て「～で（いらっしゃる）」と訳せれば、断定「なり」の連用形「に」＋接続助詞「て」
4. 形容詞・形容動詞の連用形（～く・～に）＋「て」 → 接続助詞「て」（「て」は活用語尾ではない）
5. **下接語** を見る
6. 「て＋き／けり／けむ」 → 完了「つ」連用形（下に過去「き」「けり」・過去推量「けむ」が付く）

7. 「て＋動詞」 → 接続助詞
8. 完了「つ」連用形「て」と 接続助詞「て」の見分け
9. 後ろに過去「き」「けり」・過去推量「けむ」 → 完了「つ」連用形
10. 後ろに別の動作・状態 → 接続助詞
11. 格助詞「にて」は場所・時・手段・材料・原因・資格を示す（～で／～によって／～として）

🎯 解き方のコツ（時短テクニック）

上の「識別の鉄則」は、文法の理屈にそって見分ける手順。
こちらは **試験本番ですばやく答えを出す** ための実戦テクニックです。

コツ① 「て」の後ろを最初に見る

「て」が出てきたら **直後の語** に視線を飛ばす。 - 後ろが **き／けり／けむ**（過去・過去推量の助動詞） → **完了「つ」連用形「て」**（例：行きてけり／焼きてき） - 後ろが **動詞・別の動作** → **接続助詞「て」**（例：行きて見る／聞きて笑ふ）

「て＋過去の助動詞」なら完了、「て＋次の動作」なら接続。ただし「持ちて来（き）たり」の「き」は動詞「来」なので、この「て」は接続助詞。

コツ② 「にて」と来たら格助詞のニオイ

「にて」のかたちは要注意。 - **体言＋にて** → 格助詞「にて」（場所・時・手段・材料・原因・資格）（例：京**にて**生まる／笛**にて**奏す） - 体言＋にて＋**あり・おはす・侍り**（～で〈いらっしゃる〉）
→ 断定「なり」の連用形「に」＋接続助詞「て」（例：神**にて**おはす） - 形容動詞の語幹＋にて（静か**にて**／ほのか**にて**） → 形容動詞の連用形の語尾「に」＋接続助詞「て」。動詞の連用形＋にてなら、完了「ぬ」の連用形「に」＋接続助詞「て」

直前が名詞なら、まず格助詞「にて」。下に「あり・おはす・侍り」が来たら断定を考える。「静か」「ほのか」のような形容動詞の語幹を名詞と見まちがえないこと（「いと～なり」と言えれば形容動詞）。

コツ③ 形容詞の「～くて」・形容動詞の「～にて」は連用形＋接続助詞「て」

- ・ 形容詞連用形「～く」＋「て」（高く**て**広し）
- ・ 形容動詞連用形「～に」＋「て」（静か**にて**清し）

形容詞の「く」・形容動詞の「に」の後ろの「て」は、**形容詞・形容動詞の連用形に付いた接続助詞「て」**（「て」は活用語尾ではない）。名詞＋「にて」はコツ②。

コツ④ 「して」は3つに分かれる

- ・ 形容詞・形容動詞・断定「なり」・打消「ず」の連用形＋して → 接続助詞「して」（～て・～で）
（例：若く**して**／静かに**して**／人**にして**／絶えず**して**）
- ・ 体言＋して → 格助詞「して」（～で〈手段〉／～とともに〈いっしょに行う人〉／～に命じて〈使役の相手〉）（例：二人**して**行く／人**して**言はす）
- ・ 「し」がサ変「す」（～をする）の連用形 → サ変「す」の連用形「し」＋接続助詞「て」（例：心**して**／物語など**して**）

「して」を見たら **直前**を確認。「く」「に」「ず」なら接続助詞「して」、名詞なら格助詞「して」。
ただし「～をして」と訳せるなら、サ変「す」＋接続助詞「て」。

試験本番でのチェック順序

1. 「て」の **直後**を見る（き／けり／けむが来ていないか）
2. 直後が過去「き」「けり」・過去推量「けむ」 → 完了「つ」連用形（「来（き）」などの動詞なら接続助詞）
3. 「にて」になっていて直前が体言 → 格助詞「にて」（下に「あり・おはす・侍り」が来たら断定「なり」の連用形＋接続助詞「て」）
4. 「くて／にて」のかたち → 形容詞・形容動詞の連用形＋接続助詞「て」

→ この順番で見れば、すばやく答えが出ます。

よくある引っ掛け

- ・ 「て＋き／けり／けむ」を接続助詞と勘違いする（実は完了「つ」連用形）。逆に「持ちて来（き）たり」の「き」は動詞「来」なので、この「て」は接続助詞
- ・ 「にて」の前が体言か、形容動詞の語幹か、連用形かを誤判定（格助詞か別物かが決まる分岐点）。体言＋「にて」でも、下に「おはす」などが来れば断定「なり」の連用形＋「て」
- ・ 「して」を全部接続助詞と決めつける（「彼**して**告げよ」のような格助詞用法や、「心**して**」のようなサ変「す」＋「て」あり）

採点表

- ・ 基礎（Q1～Q20）： ／20
- ・ 標準（Q21～Q50）： ／30
- ・ 応用（Q51～Q80）： ／30
- ・ 入試レベル（Q81～Q100）： ／20
- ・ 合計： ／100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

5パターンを識別する基本問題。

Q1. 次の傍線部「て」を識別せよ。

京に行き**て**、人に会ふ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「行き」連用形＋「て」＋動詞「会ふ」。動作の連結。「京に行って、人に会う」。

Q2. 次の傍線部「て」を識別せよ。

物書き**て**けり。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「書き」連用形＋「て」＋過去「けり」。「物を書いてしまった」。「て＋けり」は完了「つ」連用形の典型。

Q3. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

京**にて**生まる。

答え：格助詞「にて」 **解説：**体言「京」＋「にて」＋動詞「生まる」。場所を示す格助詞。「京で生まれる」。

Q4. 次の傍線部「て」を識別せよ。

高く**て**広し。

答え：形容詞ク活用「高し」連用形「高く」＋接続助詞「て」 **解説：**「高く」（ク連用）＋「て」＋形容詞「広し」終止。「高くて広い」。形容詞連用形＋「て」で並列。

Q5. 次の傍線部「て」を識別せよ。

物語など**して**、夜を明かす。

答え：接続助詞「て」（サ変「す」の連用形「し」に付く） **解説：**「物語」（名詞）＋副助詞「など」＋サ変「す」連用形「し」＋接続助詞「て」。「し」は「（物語などを）する」の意の動詞なので、

「して」で一語の接続助詞ではない。「話などをして、夜を明かす」。

Q6. 次の傍線部「て」を識別せよ。

出でて行く。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「出で」下二段「出づ」連用形＋「て」＋動詞「行く」。「出ていく」。

Q7. 次の傍線部「て」を識別せよ。

月見てけり。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「見」上一段連用＋「て」＋過去「けり」。「月を見てしまった」。

Q8. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

道にて人に出会ふ。

答え：格助詞「にて」 **解説：**体言「道」＋「にて」＋動詞「出会ふ」。場所を示す格助詞。「道で人に出会う」。

Q9. 次の傍線部「にして」を識別せよ。

琴の音いとあはれにして、聞く人みな泣く。

答え：形容動詞「あはれなり」連用形「あはれに」の活用語尾「に」＋接続助詞「して」 **解説：**「あはれ」（語幹）＋形容動詞「あはれなり」の連用形の活用語尾「に」＋接続助詞「して」（～で）。
「いとあはれなり」と言えるので、「あはれ」は名詞ではなく形容動詞の語幹。「琴の音がとてもしみじみと趣深くて、聞く人はみな泣く」。

Q10. 次の傍線部「て」を識別せよ。

昨日、その文を焼きてき。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「焼き」（四段「焼く」連用形）＋「て」＋過去「き」終止形。下に過去「き」が付いているので完了「つ」の連用形。「昨日、その手紙を焼いてしまった」。

Q11. 次の傍線部「て」を識別せよ。

思ひ**て**問ふ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「思ひ」連用＋「て」＋動詞「問ふ」。「思って尋ねる」。

Q12. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

嵐**にて**舟壊れぬ。

答え：格助詞「にて」 **解説：**体言「嵐」＋「にて」＋動詞「壊れ」＋完了「ぬ」。原因を示す格助詞。「嵐で舟が壊れてしまった」。

Q13. 次の傍線部「て」を識別せよ。

月清く**て**夜更けず。

答え：形容詞ク活用「清し」連用形「清く」＋接続助詞「て」 **解説：**「清く」（ク連用）＋「て」＋「夜更けず」。「月が清らかで、夜はまだ更けていない」。

Q14. 次の傍線部「て」を識別せよ。

道に迷ひ**て**けり。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「迷ひ」連用＋「て」＋過去「けり」。「道に迷ってしまった」。

Q15. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

庭**にて**遊ぶ。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「庭」＋「にて」＋「遊ぶ」。場所を示す格助詞。「庭で遊ぶ」。

Q16. 次の傍線部「て」を識別せよ。

風吹き**て**寒し。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「吹き」連用＋「て」＋形容詞「寒し」終止。「風が吹いて寒い」。

Q17. 次の傍線部「て」を識別せよ。

宝を海に投げ入れ**て**けり。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「投げ入れ」（下二段「投げ入る」連用形）＋「て」＋過去「けり」。「宝を海に投げ入れてしまった」。

Q18. 次の傍線部「して」を識別せよ。

心**して**仕うまつる。

答え：「して」（サ変連用「し」＋接続助詞「て」） **解説：**「心」（名詞）＋「し」（サ変連用）＋「て」＋謙讓「仕うまつる」。「気をつけてお仕え申し上げる」。※「心して」で「気をつけて」の慣用表現。

Q19. 次の傍線部「て」を識別せよ。

雨降り**て**川あふる。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「降り」連用＋「て」＋動詞「あふる」。「雨が降って川があふれる」。

Q20. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

都**にて**住まひす。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「都」＋「にて」＋「住まひ」＋サ変「す」。場所を示す格助詞。「都で暮らす」。

基礎編 / 20

【第2部】標準編（Q21～Q50）

接続助詞と完了の見分け、係り結び・敬語が絡む応用問題。

Q21. 次の傍線部「て」を識別せよ。

旅**して**けり。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「旅し」（サ変連用）＋「て」＋過去「けり」。「旅をしてしまった」。

Q22. 次の傍線部「て」を識別せよ。

月隠れ**て**夜暗し。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「隠れ」下二段「隠る」連用＋「て」＋形容詞「暗し」終止。「月が隠れて夜が暗い」。

Q23. 次の傍線部「て」を識別せよ。

帝、大臣を召し**て**のたまはく。

答え：接続助詞「て」 **解説：**四段「召す」（「呼ぶ」の尊敬語）連用形「召し」＋接続助詞「て」＋「のたまはく」（尊敬「のたまふ」のク語法＝おっしゃることには）。「帝が大臣をお呼びになっておっしゃることには」。

Q24. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

御使ひ**にて**参る。

答え：格助詞「にて」 **解説：**体言「御使ひ」＋「にて」＋謙讓「参る」。資格・身分を示す格助詞。「使者として参上する」。

Q25. 次の傍線部「て」を識別せよ。

日暮れ**て**、人々家に帰る。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「暮れ」（下二段「暮る」連用形）＋「て」＋動詞「帰る」。「日が暮れて、人々は家に帰る」。

Q26. 次の傍線部「て」を識別せよ。

物食ひ**て**寝ぬ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「食ひ」四段連用＋「て」＋「寝ぬ」。「物を食べて眠る」。

Q27. 次の傍線部「て」を識別せよ。

このこと、人や聞き**て**けむ。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「聞き」（四段「聞く」連用形）＋「て」＋過去推量「けむ」連体形（係助詞「や」の結び）。下に過去推量「けむ」が付いているので完了「つ」の連用形。「このことを、人が聞いてしまったらうか」。

Q28. 次の傍線部「して」を識別せよ。

鶴、首長く**して**美し。

答え：接続助詞「して」（形容詞「長し」の連用形「長く」に付く） **解説：**「長く」（ク連用）＋接続助詞「して」＋形容詞「美し」。サ変「す」は介在しない。慣用表現「～くして」（＝～くて・～であって）。

Q29. 次の傍線部「て」を識別せよ。

言ひ**て**やりぬ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「言ひ」連用＋「て」＋四段「遣る」連用形「やり」＋完了「ぬ」。「やる」は人や手紙を送ること。「（使いをやって）言い送った」。

Q30. 次の傍線部「で」を識別せよ。

物言は**で**、ただ涙のみぞ流るる。

答え：傍線部「で」は接続助詞「で」（打消接続「～ないで」） **解説：**四段「言ふ」未然形「言は」＋「で」（打消接続）。「物も言わずに、ただ涙ばかりが流れる」。「で」は「て」と区別される打消接続の助詞（古文でよく出題される）。

Q31. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

川**にて**舟に乗る。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「川」＋「にて」＋「乗る」。場所を示す格助詞。

Q32. 次の傍線部「て」を識別せよ。

静かに歩み**て**こそ、心穏やかなれ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「歩み」連用＋「て」＋係助詞「こそ」＋形容動詞「穏やかなれ」已然（こその結び）。「静かに歩んでこそ、心は穏やかである」。

Q33. 次の傍線部「て」を識別せよ。

御簾より見**て**けり。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「見」上一段連用＋「て」＋過去「けり」。「御簾から見てしまった」。

Q34. 次の傍線部「して」を識別せよ。

その人、若く**して**失せにけり。

答え：接続助詞「して」（形容詞「若し」の連用形「若く」に付く） **解説：**「若く」（ク連用）＋接続助詞「して」＋下二段「失す」連用形「失せ」＋完了「ぬ」連用形「に」＋過去「けり」。サ変「す」は介在しない。「その人は若いうちに亡くなってしまった」。

Q35. 次の傍線部「て」を識別せよ。

風吹き**て**舟漂ふ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「吹き」連用＋「て」＋動詞「漂ふ」。「風が吹いて舟が漂う」。

Q36. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

舟**にて**川を渡る。

答え：傍線部「にて」＝格助詞「にて」 **解説：**体言「舟」＋「にて」＋「川を渡る」。手段を示す格助詞。「舟で川を渡る」。

Q37. 次の傍線部「て」を識別せよ。

知り**て**侍り。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「知り」（四段連用）＋接続助詞「て」＋丁寧「侍り」。「て侍り」は「～ております」の意の接続助詞用法。動作の連結＋丁寧「侍り」で「知っております」と訳す。

Q38. 次の傍線部「て」を識別せよ。

暗く**て**月もなし。

答え：形容詞ク連用「暗く」＋接続助詞「て」 **解説：**「暗く」（ク連用）＋「て」＋係助詞「も」＋「なし」。「暗くて月もない」。

Q39. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

御所**にて**召し給ふ。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「御所」＋「にて」＋尊敬「召し給ふ」。場所を示す格助詞。「御所で
お召しになる」。

Q40. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

十日**にて**京に着きぬ。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「十日」＋「にて」＋「京に着き」＋完了「ぬ」。かかった日数（時間・期間）を示す格助詞。「十日で京に着いた」。

Q41. 次の傍線部「て」を識別せよ。

物のあはれを知り**て**こそ、人はあはれなれ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「知り」連用＋「て」＋係助詞「こそ」＋形容動詞「あはれなれ」已然（こその結び）。「物のあわれを知ってこそ、人は趣がある」。

Q42. 次の傍線部「て」を識別せよ。

笛の音絶え**て**久し。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「絶え」下二段連用＋「て」＋形容詞「久し」終止。「笛の音が絶えて
久しい」。

Q43. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

唐土**にて**書きたる文。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「唐土」＋「にて」＋「書き」連用＋存続「たる」連体＋体言「文」。「中国で書いた手紙」。

Q44. 次の傍線部「て」を識別せよ。

いみじく嘆き**て**けり。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**「嘆き」連用＋「て」＋過去「けり」。「ひどく嘆いてしまった」。

Q45. 次の傍線部「て」を識別せよ。

庭の花を折り**て**、仏に奉り**て**けり。

答え：前の「て」は接続助詞「て」、後の「て」は完了の助動詞「つ」連用形「て」 **解説：**前は「折り」(四段連用形)＋「て」＋次の動作「奉り」なので接続助詞。後は「奉り」(四段「奉る」連用形)＋「て」＋過去「けり」なので完了「つ」の連用形。「庭の花を折って、仏にお供えしてしまった」。

Q46. 次の傍線部「にして」を識別せよ。

風静か**にして**波立たず。

答え：形容動詞「静かなり」連用語尾「に」＋接続助詞「して」 **解説：**「静か」(語幹)＋形容動詞「静かなり」連用語尾「に」＋接続助詞「して」(～で・～くて)＋動詞「立た」＋打消「ず」。「風が静かで、波が立たない」。

Q47. 次の傍線部「て」を識別せよ。

笛を取り**て**、吹き鳴らす。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「取り」(四段「取る」連用形)＋「て」＋動詞「吹き鳴らす」。動作の連結。「笛を手にとって、吹き鳴らす」。

Q48. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

弓**にて**射る。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「弓」＋「にて」＋「射る」。手段を示す格助詞。「弓で射る」。

Q49. 次の傍線部「に」を識別せよ。

月隠れ**に**けり。

答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」 **解説：**「隠れ」下二段「隠る」連用＋完了「ぬ」連用「に」＋過去「けり」終止。「月が隠れてしまった」(完了の「に」)。「～てけり」の「て」が完了「つ」の連用形であるのと同じく、「けり」の上の「に」は完了「ぬ」の連用形。

Q50. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

母、病**にて**久しく臥したり。

答え：格助詞「にて」 **解説：**体言「病」＋「にて」＋「久しく臥し」＋存続「たり」。原因を示す格助詞。「母は病気で長く床についている」。

標準編 / 30

【第3部】 応用編 (Q51～Q80)

複雑な構文・係り結び・引用を含む応用問題。

Q51. 次の傍線部「して」を識別せよ。

心ある人にあらず**して**、何をか言はむ。

答え：接続助詞「して」(打消「ず」の連用形に付く) **解説：**「人」＋断定「なり」連用形「に」＋う変「あり」未然形「あら」＋打消「ず」連用形＋接続助詞「して」。「ずして」＝「～なくて・～しないで」。「心ある人でなくて、何を言おうか(言うことはない)」。

Q52. 次の傍線部「て」を識別せよ。

春過ぎ**て**夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

答え：接続助詞「て」 **解説：**「過ぎ」（上二段「過ぐ」連用形）＋接続助詞「て」＋カ変「来（き）」連用形＋完了「ぬ」連用形「に」＋「けらし」（過去「けり」の連体形「ける」＋推定「らし」がつまった形）。持統天皇の歌（『新古今和歌集』・百人一首）。「春が過ぎて夏が来てしまったらしい。（夏になると）白い衣を干すという天の香具山に（衣が干してある）」。

Q53. 次の傍線部「て」を識別せよ。

嘆き**て**過ぐる夜半に、月かたぶく。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「嘆き」連用＋「て」＋上二段「過ぐ」連体形「過ぐる」＋体言「夜半」。「嘆いて過ぎる夜中に、月が傾く」。

Q54. 次の傍線部「て」を識別せよ。

いみじき宿世の人にして、かかる目に遭ふ。

答え：接続助詞「して」の一部（断定「なり」連用形「に」に付く） **解説：**「人」（名詞）＋断定「なり」連用形「に」＋接続助詞「して」。体言＋「にして」は「～であって」と訳し、傍線の「て」は「して」で一語の接続助詞の一部（「し」をサ変「す」の連用形と見る説もある）。「並々ならぬ宿縁の人であって、こんな目に遭う」。

Q55. 次の傍線部「て」を識別せよ。

寝**て**さめて、また寝つ。

答え：両方とも接続助詞「て」 **解説：**「寝（ね）」連用＋「て」＋「さめ」（下二段「さむ」連用）＋「て」＋「寝（ね）」連用＋完了「つ」終止。「眠って覚めて、また眠った」。

Q56. 次の傍線部「て」を識別せよ。

風吹き**て**雲動く。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「吹き」連用＋「て」＋動詞「動く」終止。「風が吹いて雲が動く」。

Q57. 次の傍線部「て」を識別せよ。

来**て**見れば、誰もなし。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「来（き）」カ変連用＋「て」＋上一段「見る」已然「見れ」＋「ば」（確定条件「～したところ」）。「来て見たところ、誰もいない」。

Q58. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

神**にて**おはす。

答え：断定の助動詞「なり」連用形「に」＋接続助詞「て」 **解説：**「神」（名詞）＋断定「なり」連用形「に」＋接続助詞「て」＋尊敬の補助動詞「おはす」。体言＋「にて」の下に「あり・おはす・侍り」などが来て「～で（いらっしゃる）」と訳せるときは、格助詞「にて」ではなく断定。「神でいらっしゃる」。

Q59. 次の傍線部「て」を識別せよ。

われ仕うまつり**て**侍り。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「仕うまつり」連用＋「て」＋丁寧「侍り」。「お仕え申し上げております」。

Q60. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

昼は野**にて**遊び、夜は宿**にて**明かす。

答え：両方とも格助詞「にて」 **解説：**体言「野」「宿」＋「にて」。どちらも場所を示す格助詞「にて」。「昼は野で遊び、夜は宿で明かす」。

Q61. 次の傍線部「て」を識別せよ。

月を見**て**ぞ、昔を思ひ出づる。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「見」（上一段「見る」連用形）＋「て」＋係助詞「ぞ」＋下二段「思ひ出づ」連体形「思ひ出づる」（「ぞ」の結び）。「て」の下が係助詞でも、その先に別の動作が続くので接続助詞。「月を見て、昔を思い出す」。

Q62. 次の傍線部「て」を識別せよ。

言ひ**て**しかば、人みな笑ふ。

答え：完了の助動詞「つ」連用形「て」＋過去の助動詞「き」已然形「しか」＋接続助詞「ば」
解説：「言ひ」（四段連用）＋完了「つ」連用形「て」＋過去「き」已然形「しか」＋接続助詞「ば」（原因）。「(つい) 言ってしまったので、人々が皆笑う」。「てしか」の連結は完了「つ」連用＋過去「き」已然の組み合わせ。

Q63. 次の傍線部「て」を識別せよ。

文を書き**て**遣る。

答え：接続助詞「て」
解説：「書き」連用＋「て」＋動詞「遣る」。「手紙を書いて送る」。

Q64. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

草**にて**葺ける庵。

答え：格助詞「にて」
解説：体言「草」＋「にて」＋四段「葺く」已然形「葺け」＋存続「り」連体形「る」＋体言「庵」。材料を示す格助詞。「草で屋根をふいた庵」。

Q65. 次の傍線部「で」を識別せよ。

言は**で**思ふ。

答え：傍線部「で」＝接続助詞「で」（打消接続「～ないで」）
解説：「言は」未然＋「で」（打消接続）＋動詞「思ふ」。「言わないで思う」。

Q66. 次の傍線部「て」を識別せよ。

山に分け入り**て**、心細し。

答え：接続助詞「て」
解説：「入り」連用＋「て」＋形容詞「心細し」終止。「山に分け入って、心細い」。

Q67. 次の傍線部「して」を識別せよ。

月夜清く**して**、夜の更くるも知らず。

答え：接続助詞「して」（形容詞「清し」の連用形「清く」に付く） **解説：**「清く」（ク連用）＋接続助詞「して」。サ変「す」は介在しない。「更くる」は下二段「更く」の連体形。「月夜が清らかで、夜が更けるのも気づかない」。

Q68. 次の傍線部「て」を識別せよ。

鳥鳴き**て**春來たる。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「鳴き」連用＋「て」＋動詞「來たる」。「鳥が鳴いて春が来る」。

Q69. 次の傍線部「て」を識別せよ。

心慰めかね**て**、なほ嘆く。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「慰めかね」（複合動詞、＝慰められない）連用＋「て」＋動詞「嘆く」。「心が慰められなくて、なお嘆く」。

Q70. 次の傍線部「て」を識別せよ。

物思ひ**て**日を暮らす。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「物思ひ」（四段「物思ふ」連用形）＋「て」＋「日を暮らす」。動作の連結。「物思いにふけって一日を過ごす」。

Q71. 次の傍線部「て」を識別せよ。

使ひ、文を持ち**て**来（き）たり。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「持ち」（四段「持つ」連用形）＋「て」＋カ変「来（く）」連用形「来（き）」＋完了「たり」。「て」の下の「き」は過去の助動詞ではなく動詞「来」なので、完了「つ」ではなく接続助詞。「使いの者が手紙を持って来た」。

Q72. 次の傍線部「て」を識別せよ。

夜更け**て**帰りたいど、人みな寝たり。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「更け」（下二段「更く」連用形）＋「て」＋「帰り」＋完了「たり」已然形「たれ」＋「ど」（逆接）。「夜が更けて帰ったけれど、人はみな寝ていた」。

Q73. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

道**にて**たちまちにわかれぬ。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「道」＋「にて」＋副詞「たちまちに」＋下二段「別る」連用形「わかれ」＋完了「ぬ」。「道で突然別れてしまった」。

Q74. 次の傍線部「て」を識別せよ。

何を思ひ**て**かさは言ふ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「思ひ」連用＋「て」＋係助詞「か」（疑問）＋副詞「さ」＋動詞「言ふ」。「何を思ってそのように言うのか」。

Q75. 次の傍線部「て」を識別せよ。

仏に祈り**て**、心安し。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「祈り」連用＋「て」＋形容詞「心安し」終止形。「仏に祈って、心が安らぐ」。

Q76. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

京**にて**学びし日。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「京」＋「にて」＋動詞「学び」連用＋過去「き」連体「し」＋体言「日」。「京で学んだ日」。

Q77. 次の傍線部「て」を識別せよ。

心乱れ**て**、寝（ね）られず。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「乱れ」（下二段「乱る」連用形）＋「て」＋下二段「寝（ぬ）」未然形「寝（ね）」＋可能「らる」未然形「られ」＋打消「ず」。「心が乱れて、眠ることができない」。

Q78. 次の傍線部「て」を識別せよ。

この歌を聞き**て**、人々涙を流す。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「聞き」（四段「聞く」連用形）＋「て」＋「涙を流す」。動作の連結。「この歌を聞いて、人々は涙を流す」。

Q79. 次の傍線部「て」を識別せよ。

露置き**て**葉散る。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「置き」連用＋「て」＋動詞「散る」。「露が降りて葉が散る」。

Q80. 次の傍線部「て」を識別せよ。

春来（き）**て**、梅の花咲きにけり。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「来（き）」カ変連用＋「て」＋「梅の花咲き」＋完了「ぬ」連用形「に」＋過去「けり」。「春が来て、梅の花が咲いた」。

応用編 / 30

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

父は、四十**にて**世を背きにけり。

答え：格助詞「にて」 **解説：**「四十」＋「にて」。年齢（時）を示す格助詞。「世を背く」は出家すること。「父は四十歳で出家してしまった」。

Q82. 次の傍線部「て」を識別せよ。

中宮、御文書かせたまひ**て**、人にも見せたまふ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「給ひ」連用＋「て」＋動詞「見せ」連用＋「たまふ」。「お書きになって、人にもお見せになる」。

Q83. 次の傍線部「て」を識別せよ。

「いと尊し」と申し**て**伏し拝む。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「申し」連用＋「て」＋動詞「伏し拝む」。「『とても尊い』と申し上げて、伏し拝む」。

Q84. 次の傍線部「て」を識別せよ。

都を発ち**て**幾日になりぬらむ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「発ち」連用＋「て」＋名詞「幾日（いくか）」＋格助詞「に」＋動詞「なり」連用＋完了「ぬ」＋現在推量「らむ」。「都を発ってから何日になっただろうか」。

Q85. 次の傍線部「て」を識別せよ。

「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はいやなしやと」とよめりければ、舟こぞり**て**泣きにけり。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「こぞり」（四段「こぞる」連用形）＋「て」＋「泣き」（四段連用形）＋完了「ぬ」連用形「に」＋過去「けり」。下に動作が続くので接続助詞。『伊勢物語』第九段（東下り）。「と詠んだので、舟の人はみなそろって泣いてしまった」。

Q86. 次の傍線部「て」を識別せよ。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかり**て**、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「あかり」（四段「明かる」連用形）＋「て」。下に「紫だちたる雲の…」と別の事がらが続くので接続助詞。『枕草子』冒頭（第一段）。「(山ぎわの空が) 少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている (のがよい)」。

Q87. 次の傍線部「て」を識別せよ。

もの隔て**て**聞けば、宮の御方より、御文奉り給ふ。

答え：接続助詞「て」 **解説：**「隔て」下二段連用＋「て」＋動詞「聞く」已然「聞け」＋「ば」（確定条件「～したところ」）。「物を隔てて聞いたところ、宮様の方から、お手紙を差し上げなされる」。

Q88. 次の傍線部「て」を識別せよ。

月の都の人にして、月を恋ふ。

答え：接続助詞「して」の一部（断定「なり」連用形「に」に付く）**解説：**「人」（名詞）＋断定「なり」連用形「に」＋接続助詞「して」。体言＋「にして」は「～であって」と訳し、傍線の「て」は「して」で一語の接続助詞の一部。「月の都の人であって、月を恋しく思う」。

Q89. 次の傍線部「て」を識別せよ。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

答え：接続助詞「て」**解説：**「し」（サ変「す」連用形）＋接続助詞「て」＋補助動詞「みる」未然形「み」＋意志「む」。「し」は「（日記を書くことを）する」の意の動詞なので、「して」で一語の接続助詞ではない。『土佐日記』冒頭。「男も書くと聞く日記というものを、女の私も書いてみようと思って書くのである」。

Q90. 次の傍線部「て」を識別せよ。

内裏より召しありて、参り給ふ。

答え：接続助詞「て」**解説：**「召し」（名詞＝お呼び出し）＋ラ変「あり」連用形＋「て」＋謙讓「参り」連用＋尊敬「給ふ」終止。「内裏からお呼び出しがあつて、参上なさる」。

Q91. 次の傍線部「て」を識別せよ。

御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

答え：接続助詞「て」**解説：**「上げ」（下二段「上ぐ」未然形）＋使役「さす」連用形「させ」＋「て」。下に別の動作「御簾を高く上げ」が続くので接続助詞。『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」（香炉峰の雪）。「（女房に）御格子を上げさせて、（私が）御簾を高く上げたところ、（中宮様は）お笑いになる」。

Q92. 次の傍線部「て」を識別せよ。

春の野に、若菜摘みて遊ぶ人。

答え：接続助詞「て」**解説：**「摘み」連用＋「て」＋動詞「遊ぶ」連体＋体言「人」。「春の野で、若菜を摘んで遊ぶ人」。

Q93. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

月の光ほのか**にて**、人の顔も見えず。

答え：形容動詞「ほのかなり」連用形「ほのかに」の活用語尾「に」＋接続助詞「て」 **解説：**「ほのか」は名詞ではなく形容動詞の語幹（「いとほのかなり」と言える）。「ほのかに」（連用形）＋接続助詞「て」で、格助詞「にて」ではない。「月の光がかすかで、人の顔も見えない」。

Q94. 次の傍線部「して」を識別せよ。

もとより友とする人ひとりふたり**して**行きけり。

答え：格助詞「して」（いっしょに行う人数「～で（連れ立って）」） **解説：**体言「ひとりふたり」＋格助詞「して」＋「行き」＋過去「けり」。体言に付いて、いっしょに行動する人数を示す格助詞（サ変「す」＋「て」でも、接続助詞「して」でもない）。『伊勢物語』第九段（東下り）。「以前から友としている人一人二人と連れ立って行った」。

Q95. 次の傍線部「で」を識別せよ。

木の葉に埋もるる懸樋のしづくなら**で**は、つゆおとなふものなし。

答え：傍線部「で」＝接続助詞「で」（打消接続） **解説：**「なら」（断定「なり」未然）＋「で」（打消接続）＋係助詞「は」。徒然草第十一段。「木の葉に埋もれた懸樋のしづく以外には、まったく音をたてるものがない」。

Q96. 次の傍線部「にける」を識別せよ。

寝**にける**人ぞ多かりける。

答え：完了の助動詞「ぬ」連用形「に」＋過去「けり」連体形「ける」 **解説：**「寝（ぬ）」（下二段連用）＋完了「ぬ」連用形「に」＋過去「けり」連体形「ける」＋体言「人」＋係助詞「ぞ」＋形容詞「多し」連用＋過去「けり」連体形「ける」（ぞの結び）。「眠ってしまった人が多いことだなあ」。「にける」は完了「ぬ」＋過去「けり」の標準形。

Q97. 次の傍線部「にて」を識別せよ。

都**にて**見し人は、帝の御子**にて**おはしけり。

答え：前の「にて」は格助詞「にて」、後の「にて」は断定の助動詞「なり」連用形「に」＋接続助詞「て」 **解説：**前は体言「都」＋「にて」で、場所「～で」を示す格助詞。後は体言「御子」＋「にて」の下に尊敬の補助動詞「おはす」（連用形「おはし」＋過去「けり」）が来て「～でいらっしゃる」と訳せるので、断定「なり」の連用形＋接続助詞「て」。「都で見た人は、帝のお子様でいらっしゃった」。

Q98. 次の傍線部「て」を識別せよ。

山高く**して**、谷深し。

答え：接続助詞「して」の一部（形容詞ク活用「高し」連用形「高く」に付く） **解説：**「高く」（ク連用）＋接続助詞「して」＋形容詞「深し」終止形。サ変「す」は介在しないので、傍線の「て」は「して」で一語の接続助詞の一部。「山が高く、谷が深い」。

Q99. 次の傍線部「して」を識別せよ。

ゆく河の流れは絶えず**して**、しかももとの水にあらず。

答え：接続助詞「して」（打消「ず」の連用形に付く） **解説：**「絶え」（下二段「絶ゆ」未然形）＋打消「ず」連用形＋接続助詞「して」。『方丈記』冒頭。「流れていく川の流れは絶えることがなくて、しかも（流れているのは）もとの水ではない」。

Q100. 次の傍線部「てしがな」を識別せよ。

知り**てしがな**、と思ふ。

答え：願望の終助詞「てしがな」（自分の願望「～したいものだなあ」） **解説：**「知り」（四段連用形）＋終助詞「てしがな」＋格助詞「と」＋「思ふ」。「てしがな」は連用形に付いて自分の願望を表す一語の終助詞（成り立ちは完了「つ」の連用形「て」＋願望の終助詞「しか（しが）」＋詠嘆の終助詞「な」とされる）。「知りたいものだなあ、と思う」。※「て」だけを切り出さず、「てしがな」で一語と覚える。類例：「見てしがな」「得てしがな」。

入試レベル / 20

合計 / 100

あとかき

「て」の識別の核心： - **接続助詞「て」** が圧倒的に多い（連用形＋「て」＋動作） - **完了「つ」連用形「て」** は下に過去「き」「けり」・過去推量「けむ」など - **格助詞「にて」** は体言＋「にて」、場所・時間・手段・材料・原因・資格（下に「あり・おはす・侍り」が来て「～で（いらっしゃる）」なら、断定「なり」の連用形＋接続助詞「て」） - **「して」** は、形容詞・形容動詞・断定「なり」・打消「ず」の連用形＋接続助詞「して」（若くして・人にして・絶えずして）、サ変連用「し」＋接続助詞「て」（心して）、体言＋格助詞「して」（ひとりふたりして）の3つ
「で」（打消接続）と混同しないこと。

著作権：個別指導塾フィット / 中本裕太